文化情報

映画

■急に具合が悪くなる　がんの転移を経験しながら生き抜く哲学者と医療人類学者が交わした往復書簡からなる同名書籍を原作に、濱口竜介監督が映画化。

フランスの介護施設の施設長マリー＝ルーは、入居者を人間らしくケアすることを理想としながらも人手不足やスタッフとの意見の相違に悩まされている。ある日、マリー＝ルーは真理という日本人の演出家に出会う。彼女が演出するのは、老年の俳優・吾朗と、吾朗の孫である自閉スペクトラム症の智樹が闖入（ちんにゅう）する舞台。上演後のトークで、真理が末期のがん患者であることが知らされる。「急に具合が悪くなるかもしれない。そうなったら、あとはすぐだって」。真理の病の進行とともに、2人の関係は深まっていく…。

限りある時間、国境も立場も超え語り合う2人の女性の姿と、患者をひとりの人間として捉えようとする医療や介護の在り方が重なり、見るものに問いかける。

●上映時間：3時間16分／監督：濱口竜介／原作：宮野真生子・磯野真穂著『急に具合が悪くなる』（晶文社）／6月19日（金）TOHOシネマズ日比谷ほか全国ロードショー

©2026-Cinéfrance Studios-Arte France Cinéma-Office Shirous-Bitters End-Heimatfilm-Tarantula-Gapbusters-Same Player-Soudain JPN Partners

ひんやりさっぱり かんたんスイーツ

突然の雨が多くジメジメしたこの季節、フルーツを使ったさっぱりスイーツでお部屋時間を過ごしましょう。

料理・お菓子研究家
佐々木ちひろ

果物いっぱいでさわやかに フルーツゼリー

（160ミリリットルの容器4個分）

〈材料〉
粉ゼラチン5グラム、冷水大さじ2、オレンジ1個、ぶどう（皮ごと食べられるもの）10粒、ブルーベリー20粒、炭酸水（加糖）200ミリリットル

〈下準備〉
・冷水にゼラチンをふり入れ10分ほどふやかす。（A）
・オレンジは皮をむき果肉を取り出す。
・ぶどうは半分に切る。

〈作り方〉
❶鍋に炭酸水の半量を入れ中火にかけ、鍋肌がふつふつしたら火を止め、（A）を入れゴムベラでなめらかになるまで混ぜる。
❷残りの炭酸水を入れ混ぜる。
❸ボウルに移し、底に氷水をあて冷ます。
❹容器にオレンジ、ぶどう、ブルーベリーを入れ③を注ぎ、ラップ等でふたをする。冷蔵庫で2時間ほど冷やし固める。

ほんのりと炭酸が感じられる

甘さひかえめのソースで パンナコッタオレンジソース

（160ミリリットルの容器4個分）

〈材料〉
粉ゼラチン5グラム、冷水大さじ2、生クリーム100ミリリットル、グラニュー糖25グラム、牛乳200ミリリットル、オレンジマーマレードジャム100グラム、レモン汁大さじ½

〈下準備〉
・冷水にゼラチンをふり入れ10分ほどふやかす。（A）

〈作り方〉
❶鍋に生クリーム、グラニュー糖を入れ中火にかけ、鍋肌がふつふつしたら火を止め、（A）を入れゴムベラでなめらかになるまで混ぜる。
❷牛乳を入れ混ぜる。
❸ボウルに移し、底に氷水をあて冷やす。
❹容器に入れ冷蔵庫で2時間ほど冷やし固める。
❺小さな容器にマーマレードジャム、レモン汁を入れスプーンで混ぜ、④の上にのせる。

ヨーグルトでふんわり ブルーベリーマフィン

（直径7センチのマフィン型6個分）

〈材料〉
無塩バター70グラム、砂糖70グラム、卵1個、A（薄力粉150グラム、ベーキングパウダー小さじ1）、ヨーグルト70グラム、ブルーベリー100グラム

〈下準備〉
・バターは指ですっと押せる固さになるまで室温に戻す。
・卵は溶きほぐし室温に戻す。
・Aを合わせてふるっておく。
・ヨーグルトはなめらかになるまで混ぜ、室温に戻す。
・ブルーベリーは洗って水気をふき取る。
・マフィン型にグラシンカップを入れる。
・オーブンを180度に予熱する。

〈作り方〉
❶ボウルにバターを入れ泡立て器でなめらかになるまで混ぜ、砂糖を入れ空気を含み白っぽくなるまで3分ほどよく混ぜる。
❷卵を5回に分け入れ、その都度よく混ぜる。
❸Aの半量を入れゴムベラで切り混ぜ、ヨーグルトを入れ同様に混ぜる。残りのAを入れ切り混ぜ、8割ほど混ざったらブルーベリーを入れ粉気がなくなるまで同様に混ぜる。
❹マフィン型にスプーンで分け入れ、残りのブルーベリーをのせる。
❺オーブンに入れ25分加熱する。
❻型から出し、ケーキクーラーの上で冷ます。

ささきちひろ　企業へのレシピ提案、TV・ラジオ番組の料理、WEB・カタログ撮影などを中心に活動。

聞き書き

母の歴史

高知県　中内理津子さんのお話（9）

3092

新婦人の仲間たちと

B型肝炎を発症し1980年4月に、高知市民病院の内科に入院。朝夕、点滴治療を開始しましたが、肝機能の値は一向に下がらず、8カ月近くたったころ、主治医にすすめられステロイド治療を行いました。胸、背中、顔中、眼にも吹き出物ができ、眼科の先生が「辛いのう」と治療してくださったのが忘れられません。髪も真っ白になりましたが、肝機能値は下がっていき5月に退院しました。連合系のわが組合では、労災の〝ろ〟の字も出ませんでしたが、全労連系の日赤病院では、B型肝炎は「職業病」と労災の認定を取り、保証されたことを最近知りました。

退院後、職場復帰したものの、夜勤をすると肝機能値が跳ね上がり、入退院を繰り返し、〝もう病院では使えない〟と市の保健予防課へ移動となりました。

移動後の生活は、病院と自宅の往復のみで、年中過労状態だった生活からの解放でした。母子保健や高齢者への健康支援…と、これまでの経験を生かせる保健予防課の仕事は、楽しかったです。保健婦や職員に、いろいろと質問され、答えると、〝訪問の時に役に立つ〟と喜ばれました。

市役所の仲間に声をかけられ、新婦人に入会したのもこのころです。昼食も人参班のみんなと行くなど、日々一緒に、仕事、活動をしました。今も大事な仲間です。

つづく

町に咲くアジサイの花